

関守としての大蛇：近世異界観の一側面

著者	ポロヴニコヴァ エレーナ
雑誌名	日本思想史研究
号	47
ページ	17-36
発行年	2015-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/62576

関守としての大蛇

近世異界観の一面面

はじめに

ある時代の異界観について考える際、まずは人間界と異界との境界に注目する必要がある。二つの世界の境には、番人・境界の存在として、大蛇——ここでは蛇や龍（あるいはドラゴン）の両方を意味して「大蛇」という——が出現する。古代に関して言えば、ヤマタノオロチはその典型的な例である。中世の説話や物語においても人間界と異界の境に大蛇が姿を現すことが多い。

近世においても、異界との境界に大蛇が登場する。その一例として挙げられるのは、室町時代に作成され、江戸時代に広く流布した『富士の人穴草子』（別名『富士人穴由来記』）である。鎌倉二代将軍である源頼家の命に従って、新田四郎忠常が富士の人穴を探検したという話であるが、新田四郎は人穴に入ったところに、ある者と出会う。

不思議に思ひ嶋近く行見れば奥の方よりこびたる聲にて、汝は如何なる者なるや、我らが住家を見に來り候

ポロヴニコヴァ・エレーナ

やと、云ひながらはやく立踞れたるや、其容は八十丈斗りにて頭に十六の角を振立て兩眼は日月の如く也、程なく百丈斗りに立上りて紅の舌を巻出したりしが忠常は大きに驚き入其時俄に大音あげて、某し義は伊豆大納言十二代仁田四郎忠常と申者にて候が此度鎌倉頼家公より撰み出され御仰を蒙りて富士の人穴を一見のため某し参るべくとの仰也と、恐もなく申ければ、大蛇答て云様は、頼家公無益の事をしる者かな、汝此所を見せに差圖す、頼家が運の尽也、汝が帶したる太刀を我等に得させよと、有けるに忠常慎しんで畏り四尺八寸黄金作りの太刀を遣しける

新田四郎が出会つたのは大蛇である。『富士人穴由来記』において、その大蛇は浅間大菩薩であり、「六道を見せんとて大蛇の姿と変じ來りし」という設定になっている。ここに留意したいのは、人穴に広がる異界の入り口を守るた

めに浅間大菩薩が大蛇の形をとったことである。関守は大蛇でないといけない、というように読み取れるのである。

従来の研究では、大蛇は異界のもの（カミの使い、あるいはカミそのもの）として注目されてきた。³ 其中では、関守としての大蛇に関してごく簡単な記述も見られる。その多くは日本以外の大蛇像に関するものであり、「見張りとしての蛇」(矢島文夫)・「境界の守りとして」のナーガ(青山亨)・「内と外の世界の境界をなし」、「境域を守る」蛇(水野知昭) というように一言で終わってしまうもので、詳細な考察がなされていない。

日本の事例に関しても同様である。関守としての大蛇は主に民俗学の論考⁶で触れてあるが、それらは、村境に藁で作られた大蛇が置かれている、という習俗に関する簡単な紹介でしかない。

以上のように、境界としての大蛇の性格は、洋の東西を問わず、世界中で異界観の普遍的な要素であるにもかかわらず、先行研究ではあまり論じられていないと言って差し支えない。

本稿は、文献資料・図像資料⁷の分析を通して、近世の異界観の一側面として、境界としての大蛇像を解明する目的とするものである。その際、近世日本の大蛇像を明らかにするために、比較という方法をとる。境界の存在である大

蛇は世界中に見られるものであるが、国や文化によつてはそれぞれの特色も当然ある。しかし、ここで強調したいのはその認識の基本（基礎文化とでも言えるもの）が共通することである。それぞれの特色を論じる前は、まず共通点・類似点を把握する必要があると考えられる。

そこで、本稿では次の三点を中心に検討する。その一は三途の川に棲む大蛇であり、その二は火山噴火としての大蛇であり、その三は領域を取り巻く大蛇である。これらに対する認識はどのようなものであったのかを考察する。

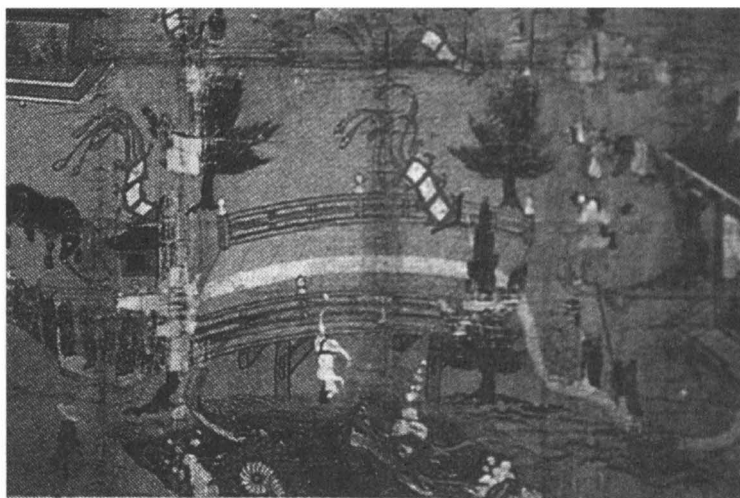
一、三途の川に棲む大蛇

まずは、三途の川に棲む大蛇について検討する。⁸ 三途の川は言うまでもなく、「この世」と「あの世」の境界である。そこに大蛇が棲んでいることは、近世に広く庶民の間で絵解きされた『熊野観心十界曼荼羅』や『立山曼荼羅』などから明らかである(図一、図二)。

『熊野観心十界曼荼羅』における地獄のイメージは、鎌倉時代に撰じられた『地蔵菩薩発心因縁十王経』(以下は『地蔵十王経』)によるものとされる。⁹ 三途の川に関しては、同様であろう。しかし、『地蔵十王経』においては、「葬頭河の曲、初江の邊に於いて官廳相運つて所渡る所を承く、前の大河は即ち是れ葬頭なり。渡るを見て亡人、奈河津と



図一、正覚寺本の熊野観心十界曼荼羅（部分）
小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』（岩田書院、2011年）より転載



図二、大江寺本の立山曼荼羅（部分）
『立山曼荼羅 物語の空間』（富山県〔立山博物館〕、2005年）より転載

名く。渡る所に三有り。一には山水瀬、二には江深淵、三には有橋渡なり。」とあるだけで、大蛇が出てこない。

文献における三途の川の大蛇の初出は、管見では、建長六（一二五四）年の伝日蓮の『十王讚歎鈔』においてである。そこには次のように書かれている。

二七日初江王本地釋迦如來。此王へ詣る道に一の大
河あり、是を三途河と名く。此河の廣さ四十由旬
也。實には奈河と云べし。此河に三の渡有之。故に
三途河と云也。上にある渡をば淺水瀬と名く。此は
淺して水膝を不_レ過、罪淺き者此を渡也。中にある
橋をば橋渡と名く。此金銀七寶の橋也。善人のみ此
を渡也。下にある渡をば強深瀬と名く。此をば惡人
のみ渡也。此渡、流れ早き事矢を射_ルが如く、浪の高
き事大山の如し。波の中に衆の毒蛇有て罪人を責食_{せめくら}。
又上より大磐石流れ来て、罪人の五體を打摧く事微塵
の如し。死すれば活かへり、活かへれば又摧く。水の
底に沈んとすれば、大蛇口を開て飲んとす。浮んとす
れば又鬼王夜叉弓を以て射る。如_キ此大苦を受けて七日
七夜を経て向の岸に著_つ。

ここに登場する大蛇（「毒蛇」）は、罪深い者（「惡人」）
にとつての責め苦の一つである。

また、室町時代の物語にも、罪人が三途の川を渡る際に

大蛇に飲まれてしまうことがある。例えば、『平野よみか
へりの草紙』においては、

又おびたゝしき大があり、これこそ三つの大がよとて、
見せたまひ候、みれば、こがね、あかざね、しろかね
の橋三つあり、（中略）はるかのす糸を見れば、くろ
がねのはし一有り、ほそきかなぐさりなり、ごくそつ
ども、ざい人をせめつけて、わたれくとせめ、さん
ぐにさいなむ、（中略）ざい人わたれば、かわのお
もてあれわたる、なみのたかさ三十ぢやうばかり、た
ちあがり〔て〕、おちつるゝをと〔は〕、せんまんのい
かつちのことし、きもたましぬも、身にそはず、おそ
ろしさ、中く申もおろかなり、そのなみまより、大
じやのつのだかく見え、まなこは、てりかゝやく日月
のごとし、くちをあきつれ、ざい人おちばのまむと、
と書かれている。

以上のように見ていくと、中世においては、罪人が三途
の川を渡ろうとすると川に落ちてしまい、そこに棲む大蛇
に飲まれてしまうことになる、という認識が成立してきた。
三途の川は「この世」と「あの世」の境界であり、そこに
棲む大蛇は境界の存在である。以上の文献に見られるよう
に、この大蛇は善人と罪人を区別するためのものであり、
罪人にとつての責め苦の一つでもある。

このような認識は『熊野観心十界曼荼羅』や『立山曼荼羅』からわかるように、展開された形ではあるが、近世にも受け継がれていた。例えば、図一に示された『熊野観心十界曼荼羅』の三途の川の部分を見ると、「あの世」に向かう死者たちは善人も悪人も三途の川の底を渡り、奪衣婆に衣を脱がせられ、閻魔王の審判を受けるように描かれている。ここに見られる橋は、中世の資料に登場するような善人あるいは罪人のための渡り橋ではなく、地藏菩薩に導かれて地獄から救済されて極楽へ行く橋である。死者たちは善人・悪人にかかわらず、誰も大蛇と出会うと読み取ることができると、中世の資料に見られるような、罪人を責める要素は近世において薄れていったのではないかと考えられる。

さて、この大蛇は何なのか。それを説明するには、日本以外の大蛇像を見ていく必要がある。ここでは、スラブ民族¹⁾とりわけロシア²⁾の伝承に見られる大蛇に対する認識に注目したい。

ロシアの民間伝承においては、人間界と異界との間に、スモローディナ川（またはプチャイ川、火の川）がある。その川は三つの小流からなっており、その周辺には必ず大蛇が棲むのである。

その川はすさまじく、

すさまじい川で、きびしいものだ。

第一の小流からは、火が出で、
第二の小流からは、火の粉が散り、
第三の小流からは、煙柱が立ち、
煙柱が立ち、火が出るのだ。

ここに、忌々しい大蛇が現れ、
十二本の尾を持つ大蛇だ³⁾。

さらに、スモローディナ川には、カリノフ橋が架かっているのである。大蛇は多くの場合、橋の下から現れてくる。

夜が来て、真夜中に彼らは火の川のカリノフ橋の下へやってきた。突然、七頭の大蛇がやってくる⁴⁾。

（兄弟は）スモローディナ川へやってきた。（中略）彼（主人公）イワン・ビコヴィチ⁵⁾はすぐに準備して、盾と剣を持ってカリノフ橋の下へ出てきた。突然、川水が波立って、樑の上に驚が鳴き出して、六頭のチュード・ユード⁶⁾がやってくる。（チュード・ユードの乗っている）馬が躓いて、肩に乗っている黒い鳥が羽ばたきして、後ろについてくる犬が毛を逆立てた⁷⁾。

このように見ると、ロシアの民間伝承にある川は日本の三途の川―三つの瀬がある川⁸⁾に、川に架かるカリノフ橋は三途の川に架かる橋に相当する。そして、そこに棲む

大蛇もロシアと日本の伝承において共通する。

ロシアの言語学者で民俗学者であるV.プロップはロシアの民間伝承における大蛇のイメージをその他の民族（ギリシア、エジプト、インド、中国、ミクロネシアなど）の大蛇像と比較した上で、関守・番人としての大蛇・呑み込む大蛇などの主な性格を指摘しながら、次のように述べている。

主人公が呑み込まれ、それから呑み込んだものの腹の



図三、イコン『キリストの復活』（部分）、1567/1568年
Рыбаков А. Вологодская икона: центры художественной культуры земли Вологодской XIII-XVIII веков (М., 1995.
А. Рибакóф『ヴォログダのイコン—13～18世紀におけるヴォログダ地方の芸術中心地—』より転載

中にいながら別の国へ運ばれていき、そこで吐き出されたり、自分で切り裂いて出るのである。（中略）獣の腹の中にいた者は死の国・異界を訪れたと見なされ、彼自身も自分はそこを訪れたと考えている。蛇の腹の中を通過することによって、彼は別の国へたどり着く。ここでは、獣の口は異界へ入り込むための条件である。⁽¹⁸⁾

このように見れば、大蛇は境界の存在だけでなく、異界（「あの世」）への入り口でもあり、異界への通路である。

同様なことは、最後の審判を描いた中近世のロシア・イコンや近世ロシアのルポーク（民衆版画）にも見られる（図三、図四）。そのような絵図の下の部分—とりわけ右下—は地獄を表すものである。そこには、奇妙な怪物・レヴィアタン⁽¹⁹⁾が死者の魂を呑み込む（あるいは救済されて蘇る死者の魂が怪物の口から出てくる）と描かれている。

以上のようなことは日本の大蛇像にも適合できる。「死者の国の番人として、「死者を食うもの」として」⁽²⁰⁾存在する大蛇は近世日本の庶民の間で絵解きされた曼荼羅にも登場する。しかも、その向きは象徴的である。『熊野観心十界曼荼羅』において、死者を呑み込む大蛇は三途の川を渡ってくる者たちに面し、その背後には地獄が広がる。大蛇に呑み込まれた死者たちは、大蛇の体を通して奪衣婆など



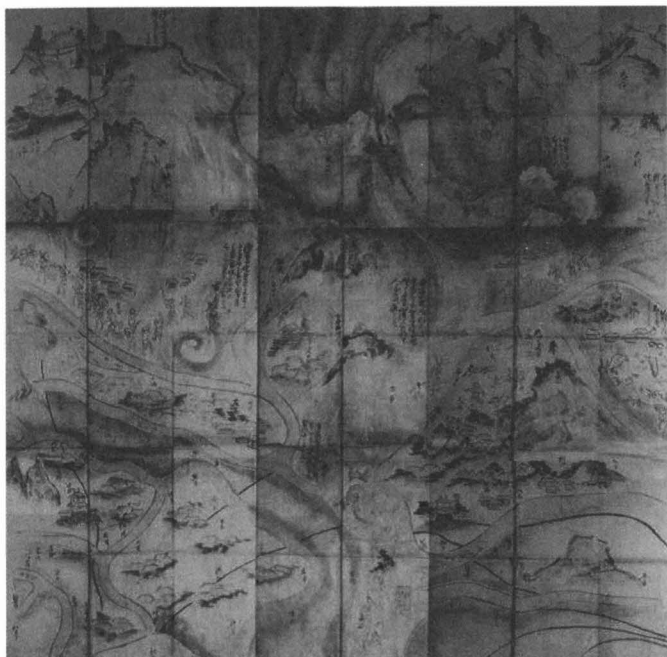
図四、ルボーク（民衆版画）『最後の審判』、18世紀
Ровинский Д. Русские народные картинки（СПб., 1900.
D. ロヴィンスキー『ロシア民衆絵画』）より転載

のいる地獄に入るのである。このように、三途の川の大蛇そのものは「あの世」への入り口・通路だと言えるのである。

二、火山噴火としての大蛇

前節では、人間界と異界（その一部である地獄）の境界にあたる三途の川の大蛇について述べた。しかし、境界としての大蛇の性格は災害——とりわけ火山噴火——としての大蛇像にも見ることができる。本節ではそれについて検討する。

洋の東西を問わず、様々な災害は大蛇に譬えられ、大蛇（あるいはその作業）と見なされていた。よく知られている例は竜巻である。日本では例えば、「天地震盪として卒かに雲味黒雲一處に集りて恰も霹靂の発らんとする如く暴風颯と吹く否や雨降り乱し散々に樹木を倒し人家を壊ち空中に巻き上げ風に飛して雨に落す」というもの・「龍巻」を「龍と疑へり」という話がある。また、英語などの typhoon という単語はギリシア語の Typhon（テュポン）⁽²¹⁾に由来するといいい、こ



図五、浅間山大噴火地獄絵図（仮題）
福地書店『和本書画目録』（平成二十六年春季号）より転載

が家の内へ入らんとせしがよふくと馬を引き
浦より佚かへりし成りと申し身をふるはせて申
けり。⁽³⁵⁾

（『石砂降上慈悲浅間震旦記』）
嘶申候ハ、（中略）菅丁モ御坐候程ノ大蛇浅間山
ヨリ出水杯モ大二出候テ利根川筋工吹抜候趣。⁽³⁶⁾

（『浅間山焼出記事（全）』）

以上の記述からは、一般庶民の認識が窺われる。各記録は庶民でない者（住職・奉行所などの役人・修験者・藩主など）によって書かれたものであるが、当時流布した見聞をそのまま記しているため、いずれも貴重な資料である。作者たちはこのような見聞を「虚説妄語」などと言っているが、それはあくまでも記録の作者の立場であり、俗説に対する批判である。このような作者側の立場はおいておくとして、一般庶民にとっては浅間山から流れてくる溶岩が大蛇のように見え、溶岩＝大蛇という認識があったと、以上の資料から窺われる。

さらに、浅間山の噴火の光景は地獄のように語られている。

誠ニあび大地獄の罪人にかしやくの責メニアウ
獄卒の枝ニ打れハ又間有へし。是ハ思ひよらぬ
事なれハ築き埋られ押流され、水ニ先キ立流其

水湯なれハ惣身ニしみてもたへあかれ死ス有様、水地獄ハおるか現世ニて重罪人間状かけられ、熱鉄の橋ヲワタるも是二はいかニまさるへき、哀レといふもあまり有。⁽³⁷⁾

『浅間山大変実記』

暮頃に至り又々真暗に相成、震動雷強く、戸障子皆々はづれ、総じて震動は雷の外に聞へ申候。所々家々にては陽氣を助け候得ば雷落不_レ申とて鉦太鼓を打立声を限りにさげび申候。阿鼻叫喚杯と申地獄の様子も斯く有べくやと連之者も申候。⁽³⁸⁾ 『甲子夜話』卷四十

九日四ツ時より火石落下り、熱雨雷火闇夜ニ飛激し、大劫災ニも如是と恐敷なれば塗笠を被り竹杖をつき香懸之宿の西なる岳に登り四方を顧に、浅間山之頂上ニ火災の柱を立て雲を貫き大虚空に轟き、巨石磊落して村里に飛人家山林一面に焼出、人民おめき呼声叫喚地獄の如く闇夜ニ現れ出ける異形之者、其色赤き事朱のことく頭白くして眼鏡に似たり。其顔定かに見わけがたけれども大概画ニ書る虎のことし。人家炎焼の中を疾風のことも奔走して人をつかみて引裂き食ふ跡恐しき事いふはかりなし。又は形は女にして高さ一丈四五尺も有へし。髪ハ四方に散乱して両眼方火光を出し逃出る人の手足を抜血を吸ふありさまは必ず罪刹婆なるべし。かくのごとくの異形のもの惣て百人も相見へた

り。(中略) 川へ入れば、水底方川伯若出て両頭三手之亀一角二毛の鯉水面に現じ人民をとり殺事数多し。(中略) すべて此三四日の間の有さまハ叫喚焦熱の出現とこそ存候。⁽³⁹⁾

『信州浅間山の事』

以上の資料から、火山噴火という災害は地獄が出現したと認識されていたと窺われる。火山が噴火したことによつて、人間界には地獄(異界)が現れた。それだけでなく、前述した資料から明らかなように、浅間山から流れていく溶岩をもつて、異界は人間界に広がっていくのである。言い換えれば、異界の境界は人間界のほうへ移動する。その流動する境界は溶岩⁽⁴⁰⁾であり、一般人の認識ではそれが大蛇であるという。

このように見ると、災害という非常時においても、大蛇と境界が密接に関係されることがわかる。関守としての大蛇は異界の領域が広がる際、先頭に立つて境界を前進させるといふように捉えられるのである。

ここでは、溶岩という火の存在である大蛇は前節に述べた三途の川に棲む大蛇とリンクする。両方の大蛇は地獄のものとして登場し、人間界と異界の境界で出現するものである。また、両方とも呑み込む大蛇として現れる。火山噴火としての大蛇は火山より流れていき、全てを呑み込むようにして人間界を地獄に変えていくと読み取れる。ここに

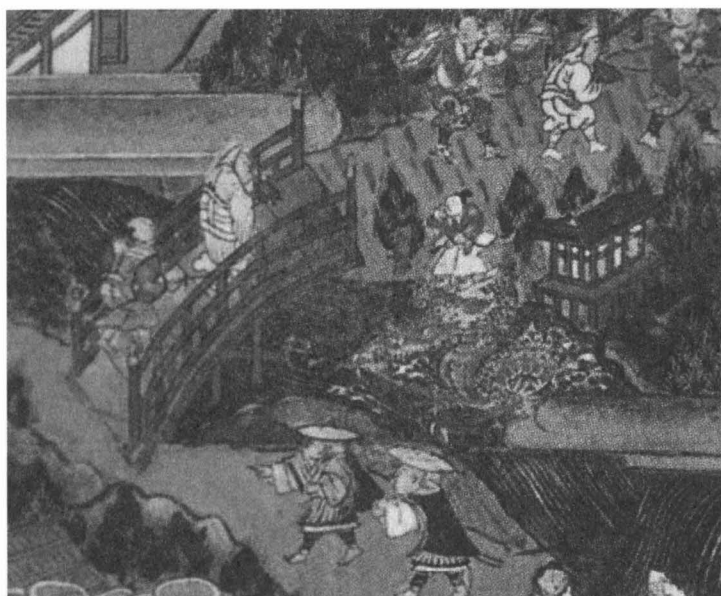
も、前節に述べた三途の川の大蛇と同様に、境界に出現する大蛇は通路として捉えることができる。

三、領域を取り巻く大蛇

以上に検討してきたように、大蛇は人間界と異界の一部である地獄の境界に出現するものであり、その境界を表すものでもある。しかし、大蛇は「この世」の領域を取り巻いて守るものでもある。以下ではそれについて考察する。

領域を取り巻く大蛇も洋の東西を問わず、見られる要素である。日本の事例としては、黒田日出夫の『龍の棲む日本』で論じられている、日本国を取り巻く龍（『大蛇』）を挙げることができる。例えば、嘉元二（一三二〇）年頃に成立した金沢文庫蔵の『日本図』はその例であろう。ここに留意したいのは、日本国を取り巻く大蛇が中世のものであるという点である。近世になると、後述するように、日本国を取り囲むのは地底鯨のほうだからである。

ところが、近世においても、国単位ではないとしても、一定の領域を取り巻く大蛇が存在していた。まず、近世庶民のために絵解きされた『那智参詣曼荼羅』に注目が必要である。この曼荼羅は那智山を描いたものであるが、その中には振架瀬橋のところに大蛇が描かれている（図六）。その橋は那智山の聖地と俗界を分けているとされ、大蛇は



図六、正覚寺本の那智参詣曼荼羅（部分）
小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』（岩田書院、2011年）より転載

那智滝の神格だといふ。⁽⁴⁵⁾

しかし、この大蛇はそれだけではない。ここにも、大蛇の境界としての性格が読み取れる。

戦国時代末期に作成された『熊野山略記』においては、那智山が大蛇（＝龍）の伏せる地だと書かれている。

那智山者、神龍之伏地、胎金之権跡也、依之神龍頭上建如意輪堂、尾上立瀧本拜殿、是喰受法味神龍不出之計略也、毎年五月四日夜、自瀧本號六十躰上面々燃火參如意輪堂、則龍蛇火焰熾盛之表示也、上下入堂之通路者、斯彼蛇背上也、然則飛龍・弁才奇巖靈石綺之奇特得而巨稱⁽⁴⁶⁾。

大蛇の伏せる地域は霊場（＝俗界に対しての異界）であり、その上に社堂が建てられているのである。

地底にある大蛇（龍伏）は建築儀礼にもよく登場するものである。インド・チベット・ネパールなどのヴァーストゥナーガやナーガバンダもその例であるが、日本においては大神神社の三輪神道や陰陽道の資料に、またそれらに依拠している江戸時代の職人巻物に出てくる。ここには例として、室町時代の成立と考えられる『簠簋内傳』の第四巻に見られる記述を挙げる。

就ニ柱立ニ龍伏口傳

春三月 頭西三 腹南一 足東四 背北二

夏三月 頭東三 腹北一 足西四 背南二
秋三月 頭南三 腹東一 足北四 背西二
冬三月 頭北三 腹西一 足南四 背東二
右如レ是案者、大聖曰、此大地底有ニ一蛇、廣量^{ニシテ}難^ル知者也。爾依^{シテ}四季^ノ、厥伏臥太異也。若頭柱立^{タル}、則父母師君死亡^ス。又足柱立^{タル}、則眷屬僕從死亡^ス。背柱立^{タル}、則妻子自己俱死亡^ス。腹柱立^{タル}、則萬福不^レ求^ル来^ル、七妖不^レ思^ハ退^ル、子孫繁昌^ハ而家内安全者^{ナリ}也。此故柱立時、腹背頭足口傳專一也。明二世間^{曆一}。

地底にある大蛇は季節ごとにその位置を変えるため、柱を立てる際には大蛇の位置に気を付けないといけない。不注意で大蛇を傷つけてしまうと、様々な災いが起こる、というのである。

しかし、『熊野山略記』における地底の大蛇（神龍）と、『簠簋内傳』や建築儀礼などに見られる龍伏は、地底にあるという点で類似しながらも、根本的に異なっている。前者は大蛇の上に寺社が建てられていることによつて、その大蛇が抑えられているのである。他方、後者は建築の際、大蛇を傷つけてはいけないのである。

このように見ると、『熊野山略記』に見られる地底の大蛇は近世に広く流布していた地底鯨と類似してくる。大蛇

の上に神社を建てるのが「神龍不出之計略」であると同様に、要石は地底鯰が動かないように立てられているのである。

近世の地底鯰は大雑書などにおいて日本国の守護者として登場する(図七)。地底鯰は日本国を取り巻くことによつて、「内」と「外」の世界を切り離し、この二つの境界を表している。この地底鯰はまさに境界の存在である。



図七、『永曆雜書天文大成』(天保六(一八三五)年刊)の「俗説地底鯰之図」、架蔵

天保六(一八三五)年刊の『永曆雜書天文大成』における「俗説地底鯰之図」には、「地震鯰の俗説小児の戯言に似たれど文殊經の龍伏の説を據として儲しものなるべし」という説明文がある。この「文殊經の龍伏の説」はどのようなものかはつきりされていないが、おそらく前述した『簠簋内傳』などに見られる記述のようなものである。すると、地底鯰(地震鯰)と地底の大蛇(龍伏)が重複してくる。

地底の大蛇も地底鯰と同様に、「この世」において境界の存在である。それは『那智參詣曼荼羅』の図像から明らかである。前述したように、大蛇が出現するのは俗界と聖地の境界においてである。この俗界も聖地も「この世」であることは言うまでもない。以上に紹介した『熊野山略記』には大蛇の頭と尾の上に如意輪堂(現在の青岸渡寺)と瀧本拝殿(飛瀧権現拝殿、現在の飛瀧神社か)が建ててであると書かれているが、資料にははつきりされていないが、その大蛇は那智山の聖地を取り巻いているとも考えられる。聖地を取り巻いていることで、地底の大蛇は大雑書

などの地底鯰と同様に、俗界と異界との境界そのものの表現として捉えることができるのである。

おわりに

以上、境界としての大蛇像について考察した。

境界の存在である大蛇は洋の東西を問わず、異界観の普遍的な要素である。人間界と異界との境界においては必ずと言っていいほど、大蛇が出現する。このような大蛇は文献資料や図像資料において多く出てくるにもかかわらず、従来の研究ではそれがあまり取り上げられてこなかった。

例えば、「この世」と「あの世」の境界である三途の川に棲む大蛇である。一見では、これは地獄に向かう罪人にとつての責め苦の一つであるが、それだけではない。

日本の「この世」と「あの世」の境界構成はロシア伝承に見られる人間界と異界の境界構成と酷似している。川があり、橋があり、大蛇が出現するという要素は日本とロシアの伝承での共通点である。そこで、ロシア伝承などに見られる大蛇像に関するV.プロップの考察を、日本の三途の川に棲む大蛇にも適用できると考えられる。つまり、この大蛇とは死者を呑み込むものであり、地獄への入り口・通路そのものである。

また、火山噴火としての大蛇も、境界としての性格を備

えている。火山噴火という非日常時は一般人にとつて、地獄の出現であつた。様々な資料からは、異界である火山から「この世」へ地獄が広がつていき、その先頭に立つ大蛇が異界の境界を前進させるといふ認識が窺われる。このような大蛇は地獄の境界としての存在である点で、三途の川に棲む大蛇ともリンクする。

本稿で論じたもう一つの大蛇は、領域を取り巻く地底の大蛇である。これも世界中の伝承に見られるものである。領域を取り巻く大蛇は「内」と「外」の境界をなし、境界そのものの表現である。境界であるからこそ、「内」（＝取り囲まれる領域の内部）の守護者でもある。近世日本の庶民では、「内」と「外」を分離しながら、「内」を守護するものとして認識されていたのは、大雑書などに見られる地底鯰のほうだと考えられるが、同様な性格を備えている大蛇も見逃すことはできない。「日本」国の守護者の役割は地底鯰にあつたとしても、「国」単位ではなく、一定の地域（『那智参詣曼荼羅』の場合）や一定の建築物（三輪神道・陰陽道や職人巻物に見られる建築儀礼の場合）を取り巻いてそれを守護するものは例外なく大蛇であつた。

三途の川の大蛇・火山噴火としての大蛇・領域を取り巻く大蛇は一見、異なる性格を持つかのようにある。前二者は地獄と深く関わるものであり、「守る」より「責める」

ような性格を備えている。他方、後者は聖域の守り神である。このように見れば、本稿で論じた三つの大蛇は地獄のものと聖地のものというように、二通りに大別できる。

しかし、地獄も聖地も異界であるということを考えれば、人間界と異界との境界に出現する以上の三つの大蛇は共通するものであるとわかる。いずれも、異界の入り口の番人である。異界へ向かう者はその境界までたどりつき、大蛇と出会う。大蛇を通過しない限り、異界へ入ることができないということは、様々な資料から窺われる。その通過方法は、大蛇の言う通りに従うか（『富士人穴由来記』の大蛇の場合）、大蛇に呑み込まれるか（三途の川の大蛇や火山噴火としての大蛇の場合）、あるいは大蛇で表現される境界を過ぎるか（領域を取り巻く大蛇の場合）、などのように様々であるが、いずれの場合も、大蛇は見張り・番人として性格を備えているのである。言い換えれば、境界を通過する資格を持たない者は異界へ入り込むことはできない。通過できるか否かを見分けるのは境界に出現する大蛇の役割だと考えられる。このように、「責める」要素のある、地獄との境界に棲む大蛇なども、聖地を取り巻いて守護する大蛇と同様に「守る」ような性格をも持っていると言える。

以上の三つの大蛇はいずれも、異界との境界を守るもの

である。異人（「カミ」）なる大蛇は異界―我々人間から見れば「外」の世界―の入り口を見張るものである。これは同様に境界の表現であり、守護者の役割を果たしている地底鯨と異なる点である。地底鯨が取り巻いている「日本」国は近世の日本人（「人間」）に対しての「内」の世界だからである。見張り・番人として類似した性格を持つ、異人なる大蛇と鯨は、「内」と「外」との関わりで、違う役割を担うのであり、それぞれの境界としての性格は異なるのである。ここでは、大蛇と大蛇以外の関守の認識上の違いが垣間見える。これに関しては更なる考察が必要であり、今後の課題とする。

本稿では、三途の川の大蛇・火山噴火としての大蛇・領域を取り巻く大蛇に焦点を当てて検討してきたが、当然のことに、境界としての大蛇はそれに限ったものではない。様々な事例を考察することによって、大蛇の全体像を説明することができ、日本人の異界観に関する理解をも深めることになるのである。本稿はその第一歩である。

註

（一）筆者は、「異界」を自己でない他者（異人）の住んでいる世界と規定する。「異人」とは凡そ、①漂泊者・旅人、②支配

者・権力者、③超人間的な存在であるカミ、④異国人・外国人の四つだとして、「異界」とはそれら四つの住む世界である。拙稿「近世庶民の異界観―異界双六を中心に―」（『日本思想史研究』第四六号、二〇一四年）を参照。

(2) 先行研究においても、蛇はアジアの龍やヨーロッパのドラゴンを生み出す母胎とされている。荒川紘『龍の起源』（紀伊國屋書店、一九九六年）、笹間良彦『図説龍とドラゴンの世界』（遊子館、二〇〇八年）、安田喜憲『蛇と十字架―東西の風土と宗教』（人文書院、二〇〇九年）などを参照。

「龍」と「ドラゴン」という単語を見ても、それぞれの蛇との関係に気付く。「龍」の象形は「頭に辛字形の冠飾をつけた蛇身の獣の形」（白川静『字通』平凡社、一九九六年、一六〇六頁）であり、ヨーロッパ諸言語に見られるdragonという単語は大きな蛇を意味するギリシア語のdrakonに由来する（*Origins: a short etymological dictionary of modern English* / by Eric Partridge. London: Routledge & Kegan Paul, 1966. P. 165）と云々。

(3) 東北大学附属図書館蔵の『富士人穴由来記』。本稿ではことわりのない限り、読点・下線部は筆者によるものである。

(4) 吉野裕子『蛇―日本の蛇信仰―』（法政大学出版局、一九七九年）、同著『日本人の死生観―蛇 転生する祖先神―』（河出書房新社、二〇一五年）、小島環禮編著『蛇の宇宙誌』（東京美術、一九九一年）、荒川紘の前掲書、『特集 ドラゴン・ナーガ・龍』（『アジア遊学』第二八号、二〇〇一年）、黒田日出夫『龍の棲む日本』（岩波書店、

二〇〇三年）、近藤良樹「畏怖される龍・おろちのルーツ―神話・昔話の中の蛇たち―」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六六巻、二〇〇六年）、笹間良彦の前掲書、安田喜憲の前掲書などを参照。

(5) 矢島文夫「イブをだました蛇―西アジアからヨーロッパへ―」（小島環禮編著の前掲書）、青山亨「インドネシアのナーガ―王権・地下界・境界―」（『特集 ドラゴン・ナーガ・龍』前掲書）、水野知昭「北欧の神々と世界蛇の闘争神話」（『特集 ドラゴン・ナーガ・龍』前掲書）などを参照。

(6) 萩原秀三郎『境と辻の神』（『目でみる民俗神シリーズ』第三巻、東京美術、一九八八年）、笹本正治『蛇拔・異人・木霊―歴史災害と伝承―』（岩田書院、一九九四年）などを参照。本稿で扱う図像資料とは近世庶民で広く絵解きされた曼荼羅などである。そのような資料は絵解きされていたため、当然のことに絵解き台本のようなものがあつたと考えられる。

(7) 絵解きの記述は様々な文献資料―例えば、近松門左衛門の『主馬判官盛久』第四における「びくに地づくの糸とき」―において断片的に見られるのであるが、今の段階では完全台本が見つかっていないので、本稿では図像の分析を基に論を進める。

(8) 三途の川に棲む大蛇について触れた先行研究では、石破洋「冥界への旅―「死出の山」と「三途の川」をめぐる―」（『鳥取県立八頭高等学校国語科研究紀要』第三号、一九七八年）、小野寺郷「日本に於ける三途の川の変遷」（『アカデミア人文・社会科学編』南山大学、第六〇号、一九九四年）、同

著「奈河と三途の川」(『南山宗教文化研究所研究所報』第五号、一九九五年)などがあるが、いずれも様々な資料を紹介する点では貴重であるが、三途の川に棲む大蛇に関する考察がなされていない。

同じく、本節で資料として用いる『熊野観心十界曼荼羅』や『立山曼荼羅』に見られる大蛇については、このような曼荼羅には大蛇がいる、という一言の紹介があるだけで、重要な要素として注目されていない。曼荼羅に関しては、小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』(岩田書院、二〇一一年)、同著『図説地獄絵の世界』(河出書房新社、二〇一三年)、福江充『立山曼荼羅―絵解きと信仰の世界―』(法蔵館、二〇〇五年)などを参照。

(9) 小栗栖健治『図説地獄絵の世界』(前掲書)。

(10) 「仏説地藏菩薩発心因縁十王経」『国訳一切経 大集部五』大東出版社、一九三六年、三〇一頁。句読点はそれに従う。
(11) 「十王讃歎鈔」『昭和定本 日蓮聖人遺文』第三巻、総本山身延久遠寺、一九七六年、一九七〇―一九七一頁。句読点はそれに従う。

(12) 「平野よみかへりの草紙」『室町時代物語集』第二巻、井上書房、一九六二年、三五七―三五八頁。読点はそれによる。

(13) Добрая и злая («Добруйня и злая») // Былина («Филина (ロシア英雄叙事詩)」). Д., 1986. С. 78. 原文はロシア語である。日本語訳は筆者による。

(14) Пожитишок («Покайтишук») // Народные русские сказки А.Н.Афанасьева в трех томах (『A.N. アファナーシェフ

編のロシア民話』全三巻). Т. I. М., 1957. С. 262. 原文はベラルーシ語であり、日本語訳は筆者による。

(15) この民話ではチュード・ユードが具体的にどのような恰好をしているのかはつきりされていないが、スモローディナ川のカリーノフ橋という棲みかや多頭のものであることからすれば、それは大蛇と同様なものであると考えられる。

(16) Иван Быкович («Иван・Бикович») // Народные русские сказки А.Н.Афанасьева (указ. соч.). С. 280. 原文はロシア語である。日本語訳は筆者による。

(17) 一般的には、三途の川(あるいは三瀬川)は三つの渡り―浅瀬・深淵・橋―がある川として解釈されている。本文に引用した『地藏菩薩発心因縁十王経』や『十王讃歎鈔』にもこのような記述が見られる。筆者はこれを否定するつもりはないが、ここに留意したいのは、日本における三途の川・三瀬川の概念が時代によつて次第に変わっていったことである。渡りとしての橋は一部の資料にしか見られず、「みつせ川あささのほどもしらはしとおもひしわれやまづわたりなん」(十世紀後半成立の『蜻蛉日記』の「道綱母の家の集」)や「三瀬川は水増されど伴なふ引船もなし」(夜食時分の『好色萬金丹』第一巻、元禄七(一六九四)年刊)などに見られるように、多くの場合は死者が善人か悪人かにかかわらず、川底を歩いて渡ったようである。このように見ると、もともとは渡りとして、深浅の違う三つの瀬があったのではないかと考えられる。

また、本文にも述べたように、近世に広く絵解きされた

『熊野観心十界曼荼羅』には、「あの世」に向かう死者たちが善人も悪人も三途の川の底を渡る、というように描かれている。橋はあるが、それは死後の世界への渡り橋ではなく、地獄から極楽への渡り橋である。

以上のことを踏まえて考えると、(渡りとしての)三つの瀬がある日本の三途の川と、三つの小流があるロシアのスモロディナ川は類似概念として捉えることができる。

- (18) В. Я. Пропп. Исторические корни волшебной сказки (V. Пролуп. 『魔法昔話の起源』) // Морфология (волшебной) сказки. Исторические корни волшебной сказки. М., 1998. С. 314. 齊藤君子による日本語訳本がある(ウラジミール・プロップ著 齊藤君子訳『魔法昔話の起源』せりか書房、一九八三年)が、本稿では筆者による日本語訳とする。

- (19) レヴィアタンも大蛇の類である。それは『旧約聖書』の「イザヤ書」(27:1)における「その日、主は厳しく、大きく、強い剣をもって逃げる蛇レビヤタン曲がりくねる蛇レビヤタン」を罰した海にいる竜を殺される。」(『聖書 和英対照』日本聖書協会、二〇〇八年、(旧)一三三九頁)という記述から窺われる。また、同じく『旧約聖書』の「ヨブ記」(2:7-8、23:24)における記述からは、レヴィアタンが地獄の入り口にいるものであり、地獄の入り口そのものであると窺われる。

- (20) В. Я. Пропп. Указ. соч., с. 353.

- (21) また、『立山曼荼羅』に描かれている、三途の川に見立てられている娑谷川の大蛇でもある。

- (22) 庄子玄啓『天保荒侵傳』、天保十(一八三九)年、国立国会図書館蔵。

- (23) テュポンは、ギリシア神話に登場する、大蛇の形をした神であり、風の神々の父親でもある。

- (24) *Origins: a short etymological dictionary of modern English* (Op. cit.), p. 747.

- (25) 蛇拔や法螺抜けに関しては、笹本正治「蛇抜・異人・木霊——歴史災害と伝承——」(岩田書院、一九九四年、齊藤純「法螺の怪——地震鯨と災害の民族のために——」(『心意と信仰の民族』吉川弘文館、二〇〇一年)、同著「道灌山の法螺抜け——瓦版の怪異譚とその背景——」(『世間話研究』第一三三号、二〇〇三年)、同著「紀伊加太の法螺抜け——災害伝承と異界——」(『説話・伝承の脱領域』二〇〇八年)、同著「蛇抜けと法螺抜け——天変地異を起こす怪物——」(『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から——』国際研究集会報告書、第四五集、二〇一五年)などを参照。

- (26) 管見では、大蛇と火との関係について触れた論考は、平岡聡「インド仏典に出没する龍(ナーガ)」(『特集 ドラゴン・ナーガ・龍』前掲書)や、近藤良樹「畏怖される龍・おろちのルーツ——神話・昔話の中の蛇たち——」(『広島大学大学院文学研究科論集』第六六号、二〇〇六年)しかない。

- (27) 『ブッダが謎解く三世の物語——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳——上巻(平岡聡訳、大蔵出版、二〇〇七年)の第三章においてである。

- (28) 火山と大蛇を結び付ける認識は、古代ギリシアなどにも見

られる。シチリア島のエトナ火山は前述したテュポンの封印された場所であり、テュポンの動くと火山噴火が起こると、ギリシア神話などで語られている。

- (29) 『日本三代實録』(新訂増補國史大系、第四卷)、吉川弘文館、二〇〇〇年、二八九頁。句点はそれによる。

- (30) 『平家物語―長門本―』国書刊行会、一九〇六年、一三二頁。読点はそれによる。

- (31) 浅間山噴火の近世人の受けとめ方に関しては、渡辺尚志『浅間山大噴火』(吉川弘文館、二〇〇三年)に言及がある。様々な資料を基に、大蛇との結びつきについても触れてあるが、まだ考察の余地がある。

- (32) 『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ―記録編(一)―』群馬県文化事業振興会、一九八六年、五一頁。句読点はそれに従う。

- (33) 同上、一五七―一五八頁。句読点はそれに従う。

- (34) 同上、三一〇頁。句読点はそれによる。

- (35) 『浅間山天明噴火史料集成Ⅲ―記録編(二)―』群馬県文化事業振興会、一九八九年、八〇頁。句読点はそれに従う。

- (36) 『浅間山天明噴火史料集成Ⅳ―記録編(三)―』群馬県文化事業振興会、一九九三年、二六七頁。句読点はそれによる。

- (37) 同上、一八五頁。句読点はそれに従う。

- (38) 同上、二九七頁。句読点はそれによる。

- (39) 『浅間山天明噴火史料集成Ⅴ―雑編―』群馬県文化事業振興会、一九九五年、八一―八二頁。句読点はそれによる。

- (40) また、一般的に蛇抜と呼ばれる土石流もこのような流動する境界である。


- (41) 例えば、北欧神話に見られる、「中つ国」(「人間の住む世界」)を取り巻いて自らの尾をくわえる大蛇「ヨルムンガンンド」(ミッドガルド/ミズガルズ蛇とも)はその一例である。また、中世ロシアに成立した『バビロン王国の物語』にも、バビロン王国を取り巻く大蛇がある。

- (42) ただし、この日本図は西半分しか残されていないため、注意する必要がある。日本国を取り巻くのは鱗のある生物だと明確であるが、東半分には描かれるはずのその頭や尾はどうなっているのか明らかではない。

- (43) 例えば、寛永元(一六二四)年刊の『大日本国地震之図』に書かれている「此うをのな大たうれんといふ、又七はとうきよといふ、又まかさつきよ共云」という記述があり、日本を取りまく生物は魚だと三回も強調されているが、この記述を取り上げている黒田日出夫はその生物が龍であるという(黒田日出夫の前掲書、一七四―一七五頁)。

また、黒田日出夫は「龍は中世から大鯰でもあった」と述べているが、その根拠としては『竹生島縁起』に見られる、竹生島を取り巻く龍が鯰に変身することしか挙げられていない。龍＝鯰という認識は果たしてどれほど一般的であったのか疑問であり、この点に関しては更なる検討が必要である。

近世における日本国を取り巻く地底鯰に関しては、拙稿「大雑書に表現される「世界」観―「須弥山図」と「地底鯰之図」を中心に―」(『日本思想史学』第四六号、二〇一四年)を参照。

- (44) 篠原四郎「那智権現曼荼羅の絵解」『那智叢書』第三卷（復刻版）、熊野那智大社、二〇〇八年、八二頁、西山克『聖地の想像力―参詣曼荼羅を読む―』（法蔵館、一九九八年、一九三―一九五頁）など。
- (45) 篠原四郎の前掲書（八二頁）、黒田日出夫「熊野那智参詣曼荼羅を読む」（『思想』第七四〇号、一九八六年、一二〇頁）、山本殖夫「那智参詣曼荼羅の物語図像」（『熊野歴史研究』第四号、一九九七年、三一頁）など。
- (46) 「熊野山略記」熊野那智大社文書第五卷、続群書類従完成会、一九九二年、一一九頁。読点はそれによる。
- (47) ヴァーストゥナーガやナーガバンダについては、Boner, A. & Sadāśiva Rath Śarmā, *Śilpa Prakāśa, Medaevai Orissan Sanskrit Text on Temple Architecture* (Leiden: Brill, 1966), M. Mori, "The Vastunāga Ritual Described in Tsong-kha-pa's *sNgags-rim chen-po*", in S. Hino and T. Wada eds. *Three Mountains and Seven Rivers: Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume* (Delhi: Motilal Banarsidass, 2004) 森雅秀「ヴァーストゥナーガに関する考察」（『東洋文化研究所紀要』第一四二号、二〇〇三年）などを参照。
- (48) 例えば、「 権源流集異大工鍛冶」（『大神神社史料』第五卷、大神神社史料編修委員会、一九七八年）、「三輪流神道武勇部」（同第六卷、一九七九年）、「三輪流神道奈良大工兵衛尉朝清大事」（同第十卷、一九八二年）や、「番匠十六ノ巻一流大事」（宮内貴久「番匠巻物―書き伝えること・呪物・文字意識―」（『奥会津地方の職人巻物―書承と口承の交錯―』神奈川大学
- 日本常民文化研究所、二〇〇六年）においては、龍伏が見られる。
- (49) 「簠簋内傳」『神道大系 論説編十六 陰陽道』神道大系編纂会、一九八七年、七七―七八頁。
- (50) 拙稿「大雑書に表現される『世界』観―「須弥山図」と「地底鯨之図」を中心に―」（前掲書）。
- (51) 中村璋八は「簠簋内傳」の龍伏に関する記述に見られる「大聖」を大聖文殊と校訂している（『簠簋内傳本文とその校訂』『日本陰陽道書の研究』汲古書院、二〇〇〇年）。すると、『簠簋内傳』の記述は『永曆雜書天文大成』の「俗説地底鯨之図」にある「文殊經の龍伏の説」と関連できるのである。
- (52) 例えば、死者でない者は基本的に異界の一部である地獄に入ることはできない。ただし、『富士入穴由来記』の新田四郎のように、生きている者でも大蛇の言う通りにすれば入られるのである。また、『那智参詣曼荼羅』に見られる聖地に入る者は、聖俗の境界である振架瀬橋を通る前に、二ノ瀬橋のところで禊をしないといけないのである。禊は聖地に入らるる必須条件である。